

スイス学校便り

高校の卒業試験と大学入学資格試験

を兼ねるMaturを経験して(1)

米川 恵子



米川 恵子 / よねかわ・けいこ

1979年 京都生まれ。

1993年よりスイス、Zurich(チューリッヒ)郊外のZumikon(ツミコン)市に在住。

2000年 Zurich州立Stadelhofen(シュタデルホーフェン)高校(ギムナジウム)のラテン語科を卒業。

今回と今回は、終えたばかりの卒業試験と、こちらの卒業式の様子についてお便りしたいと思います。

先日、4年半のギムナジウムの全課程を修了し、卒業しました。テストに追われてばかりいた日常生活と、引き続いて最後に行われた卒業試験に向けての集中的な勉強から、とうとう解放されたことに大きな喜びを感じる一方で、長い間共に過ごしてきたクラスのみんながちりぎりになってしまうことに寂しさも感じています。

ギムナジウムの卒業試験は大学入学資格試験を兼ねていて、ドイツ語圏のスイスではMaturと呼ばれています。Maturという言葉はラテン語のmaturusに由来し「成熟した」(英語: mature)を意味します。一方、同じ言語の国ドイツでは、この試験をAbiturと呼び、この言葉はラテン語のabireに由来し、それには「出立する」という意味があります。

前々回に書きましたように、チューリッヒ州の公立ギムナジウムは5つの学科(古典科、ラテン語科、理数科、語学科、経済科)に分かれていて、それぞれの学科には重点の置かれる科目があるのですが、ギムナジウムの生徒が最終的に身につけるように期待されるものは決してこの重点科目についての専門知識ではなく、さまざまな教科全般にまたがった豊かで広い知識、つまり言い換えるとう一般教養なのです。

例えば、私の通っていたラテン語科のギムナジウムでは、最重要科目であるラテン語の他に必修の言語が3つありましてで「文系の」ギムナジウムに見えますが、自然科学の科目(数学、物理、生物、化学)もすべて必修でした。これらの科目も、卒業の時点で十分な成績がとれていないと落第するため、生徒たちも力を抜くことはできませんでした。

またこれらの科目担当の先生方は、当然のことながらそれぞれご自分の教える科目の重要性に確信を待っておられ、授業に大変

熱がこもっていたことを思い出します。例えば、私たちの生物の先生はチューリッヒ州のギムナジウム中で最も優れた生物の先生という評判がありますが、いつも生徒の興味をくいと引きつけるような現代社会の最もホットなテーマと結びついた内容を、大変良く準備され、かつ工夫のある教授法で教えて下さいました。まるで先生の「生物」への情熱が爆発しているような感じの授業をされたので、私は心の中で「爆発先生」と呼んでいました。モジャモジャのカールした髪の毛もそんな雰囲気にとびりだったのです。

さてこのように主要科目とされていない科目にも、一息つかない、ということは私たち生徒にとってさらなるプレッシャーでした。しかしそのお陰で自然科学への興味と関心を大いに喚起され、大学は理数系に進学する予定の友人も少なくありません。

ギムナジウムが重点科目によって種類分けされている目的は、あくまで生徒の入学時点での興味や傾向に合わせるためであり、決して将来的な関心、進路、能力や可能性を束縛したり、狭めてしまうものではないのです。大学で専門的な学問を始める前にそのベースとなる幅広い一般教養、及び論理的、抽象的思考や自己表現の基礎訓練を4年半かけてギムナジウムでしっかりと身につけるものと考えられています。

大学入学資格試験がMaturと呼ばれるのは、これで土台がしっかり固まり、準備が整ったという意味で「成熟」という言葉と結びついたのではないかと思います。

(次号につづく)